

尼僧からの発信 京都市右京区・西寿寺

みんてら

京都市右京区の泉谷に浄土宗の尼寺・西寿寺はある。江戸時代初期に岱中良定上人が開山して以来、念仏道場としてその伝統を刻んできた。現住職の村井定心氏(55)は、寺院の場を活かし、自然葬墓地などを整備、癒しのためのアロマテラピーを取り入れるなど、新しい寺院像を模索する。敬慕する先代が守り託してくれたお寺を「たくさんの人に好きになってもらいたい」と励む日々だ。

西寿寺の境内には、家庭向けの自然葬をはじめ、樹木葬や散骨葬などの墓地が整備されている。高台にあって、京都市内を一望できる墓地は魅力的だ。納骨を求める人には「会員」として西寿寺と縁を結んでもら



村井定心住職

う。境内の杉林を切り開き、バリアフリー化も推進。村井住職によるこれらの境内整備は、ダーウィンの進化論やドラック運ぶ。会員の中には法事や葬儀を依頼する人も多

れでいて思いやりがあった。僧侶としての生き方を見せてくれた「最高」と思っていたけれど、今はきつとお浄土で幸せに暮らしているんじゃない。心からそう思えた時、心の中に「先代の居場所が見つかった」。

クリーフの体験は村井住職に大きな転機も与えた。「僧侶の使命はクリーフケアとわかった。先代は突然死という別れ方で、遺族の痛みを覚えてくれた」。村井住職はカウンスリングの研修を受け、自坊ではクリーフケアの学習会として、分かち合いの会、傾聴の時間、クリーフケアサポーター養成講座なども始めた。東日本大震災でも多くの人が大切な人を突然死で亡くした。村井住職

グリーンフケアを實踐中

ーのマネジメントをヒントにした「お寺イノベーション」なのだという。従来の「月参り」は全盛期の3分の1程度に減り、「こうした現状で生き残るにはお寺の新しい生き方を見つけなければいけない」と危機感を持つ。最初の自然葬墓地が完成して7年経つが、今やその「会員」たちは「檀家」と共にお寺を支える両輪になってきている。

く、新しい「つながり」に手応えを感じている。「西寿寺を好きになっ

の師匠」だった。

は被災地支援団体を通して、子どもを亡くした遺族に手元供養ができる

てもらうことが一番」と語る村井住職。その根底には「奇跡の出会いだった」という師匠・稲垣良徹尼の存在がある。村井住職は愛知県的一般家庭に生まれた。会社勤めで人間関係に悩み、カルチャーセンターで仏教講座を受けた。それをきっかけに僧侶の道を志し、20代半ばで出家。様々な縁をつなぎ西寿寺で先代と巡りあった。庵主さんは徳分があつて皆から尊敬された人。心根が綺麗で、信念をもち、そ

体調を崩した先代の介護は14年続いたが、「それが苦にはならなかった」。しかし、別れは突然訪れた。3年前の春、いつものように夕食を食べていると突然、大動脈瘤の破裂で亡くなった。83歳だった。「もう立ち直れない」。

村井住職は深いクリーフ(悲嘆)に陥り、カウンスリングに通った。そんな過程にあって、お盆の準備をしていたある日。ふとこんな思いが心を巡った。「庵主さん、突然に亡くなって可愛そうやな

「こゝなられてもなお、最高の師匠だった」。その背中を見て、自身はどんな「住職」になるのか思いを巡らす。「私は聖職者の住職としては程々の

西寿寺ではアロマテラピーやエンディングノートなどの学習会、コンサートなど多彩な催しも開くが、檀信徒よりもむしろ、会員が積極的に足を

「もう立ち直れない」。

「こゝなられてもなお、最高の師匠だった」。

「こゝなられてもなお、最高の師匠だった」。

師匠の死から使命を確信

真ん中でいい。でも限りなく優秀な宗教法人の代表役員になろうと決めた」のだと言う。

師匠が愛した西寿寺を今は一人守る。プレッシャーを感じつつも、新たな活動を起して勝負する。「失敗してもいい。そこから学べることもある」と前を向く。

西寿寺にとっての課題は、多くの寺院同様「後継者問題」だ。現在は「チーム西寿寺・プロジェクトスタッフ」として、男女を問わず21世紀型の寺院創りを共に目指す人材を探している。「新しい葬送のあり方を考えてくれる人」「明るくて、前向きな人」。難しい課題でもあるが、そんな後継者の出現を待ち望む。

企画・(株)川本商店みんてら事業部十仏教タイムス編集部

これからのお寺を考える情報誌『みんてら』を購読希望の方はみんてら編集部 埼玉県川口市上青木1-7-4 ☎048-254-2222 F A X 048-254-0888まで

